

人生の岐路 - Hurston 書簡の語るもの -

西垣内 磨留美^{*1}

【要 旨】 フロリダ大学図書館所蔵の書簡を検討した結果, Zora Neale Hurstonの人生の分岐点をめぐる側面, そしてそこから導かれた晩年の姿が明らかになった。Hurstonは, 1935年, 奨学金を得て学位を取得し大学で教鞭をとるという道につながる選択を捨てる決断をするが, これはその後を左右する重要な決断であった。この決断をHurstonにさせたのは, フォークロアやフードゥに関する資料を収集し, アフリカ系アメリカ人の文化をコンサート, 演劇, 小説の形で世に示し保存するという彼女が持っていた志向である。この活動に対する熱意は学位取得を断念させるに足るものであり, この決断が彼女を代表作につながる執筆活動への道へ向かわせることになったと考えられる。また晩年においては, 貧困や病気のため十分な作家活動ができない状態にあって, Hurstonはなお創作意欲を持ち続け, 物書きとしての人生を貫いていたのである。

【キーワード】 Zora Neale Hurston, 書簡, 人生の分岐点, 志向, 晩年

はじめに

Zora Neale Hurston については, Robert E. Hemenway による優れた伝記 *Zora Neale Hurston: A Literary Biography* があり, その生涯の概要はわかっている (Hemenway, 1980)。しかし, 幼少時から死に至る広い範囲について一冊の書物で語る伝記では, 事件や行動の経緯や細部, Hurstonの感情など, おおきれない部分が出てしまうことも事実である。したがって, 作家の生涯において疑問が残る部分に関して, 関連する書簡を綿密に探ることは, 解明に有効な糸口となる。また, 現在のHurston研究においては, 書簡の研究は進んでいるとは言えず, この領域を開拓していくことにも意義があると考えられる。Hurstonの書簡集は出版の予定があるとの情報はあがるが, いまだ未刊であり, 現在の状況では原典にあたらない(注1)。また, 書簡集が出版されてからであっても, 筆跡の変化, 書簡中のメモ, 書簡の状態などが資料となる研究においては, 1次資料を調査する必要がある。

Davis (1997)によれば, Hurstonの書簡はHurstonと冠されたコレクションがあり書簡以外の草稿などの種類も数多いフロリダ大学図書館他15の図書館において保管されているが, 全書簡を俯瞰した体系的な整理はなされていない。このうち, 重要な書簡として伝記において数多く言及されているのは, イェール大学図書館, ハワード大学図書館, フロリダ大学図書館などの書簡である。フロリダ大学図書館は書簡の所蔵数が多く, フロリダ大学のコレクションから未公表の資料の入手や充分調査されていない事実の確認が予測されたこと, また, 多くの書簡を資料としている伝記において他の書簡はそのまま抜粋, 引用されているにもかかわらず, このコレクションの書簡は伝記の論述の中に組み込まれている形でまとめられており, 1次資料を調査する必要性が高いことが認められた。

本論では, 2000年7月30日から8月4日に行ったフロリダ大学図書館手稿・稀覯本保管所Hurstonコレクションの調査から得られた結果をもとに, Hurstonの書簡を紹介しつつ, Hurstonの作家としての人生の重要な側面について検証したいと思う。フロリダ大学

^{*1} 長野県看護大学
2001年12月17日受付

Hurston コレクションの書簡はHurston宛て及び関連書簡を含め、1955年から1960年までの書簡が納められたボックス1（76通）と1926年から1955年までの書簡が納められたボックス2（88通）に分類されている。本稿で引用、紹介するのは、ボックス2の7通の書簡から抜粋したものである。

1. 人生の分岐点

1934年から1935年にかけては、Hurstonの生涯において特筆すべき時期である。Hurstonはこの時期に人類学者となり大学で教鞭を取るという道を捨て、経済的な不安を抱え続ける後半生につながる道を選ぶ決断をする。このときの決断が必ずしも幸福とは言えない後半生を決めたと言っても過言ではない。すなわち、1934 - 35年はHurstonが物書きとしての将来を定めた人生の分岐点と言えるのである。Hemenwayによる伝記の記述だけでは、なぜHurstonがこのように動いたのかははっきりとは見えてこない。そこで、この時期のHurstonの行動や内面の動きを書簡を手がかりに追うことにする。

1934年12月13日にEdwin Osgood Grover宛に書かれた書簡でHurstonは次のような報告を行っている。Groverは詩人であり、後にフロリダ州ロリンズ大学の副学長になった人物であるが、長い間Hurstonと友好関係にあった。このことは、HurstonがGrover宛に“Dear Friend”という書き出しで始めた手紙の存在があり、また、数少ない長編小説の一つ *Moses, Man of the Mountain*（「山の男モーゼ」）をGroverに献じていることからわかる（注2）。GroverはHurstonの活動を支援し、最初の長編小説 *Jonah & Gourd Vine*（「ヨナのとうごま」）（Hurston, 1990a）の出版にも協力している（注3）。O Sullivan と Lane の“Zora Neale Hurston at Rollins College”ではGroverはHurstonの“academic patron”であったと記述されている（O Sullivan, Lane, 1991: p.131）。

The Rosenwald Fund, the organization that had previously proposed me for a chair at Fisk Univ. now feels that they

want to do something bigger. I am asked to fill out an application blank for a fellowship so that I may take my doctor's degree. Perhaps that is best after all for I can do first the one then the other. I will be eligible [sic] for a full professorship, for more extensive field work [sic] which has already been suggested, while at the same time my interest in the theatre need not die.

ローゼンウォルド財団は、フィスク大学での教員のポストを提示していたんですが、今はもっと大きなことをしたいと思っているのです。博士の学位が取れるように、奨学金の申請をなさいと言われました。恐らくこれが今私ができる最善の策でしょう。教授の職にも就けるでしょうし、企画中のフィールドワークをもっと推し進めることもできるでしょう。それに、劇の上演への関心を捨てる必要もないのですよね（1934年12月13日付け Edwin Osgood Grover 宛書簡）（注4）。

このとき、ローゼンウォルド財団、人類学の恩師 Franz Boas、ともにHurstonにコロンビア大学で博士号を取得させ彼女を本格的な研究者にしたいという意図を持っていた。しかし、この書簡には、学位を取るための研究計画や研究内容への言及はなく、研究活動そのものへの熱意というよりは、将来の職、計画中のフィールドワークといった今後できること、あるいは、演劇への興味を捨てる必要もないというように今熱中していることに注意が向いていることが示されているのである。特に最後の言葉は演劇の上演活動を続けたいという気持ちを示す発言であり、学位取得のために勉強をすることになっても上演活動から切り離されることにはならないという方向に考えが及ぶことは、Hurstonにとっての上演活動の大切さを物語るものと言えよう。

伝記によると、この書簡の日付の翌日、Hurstonは、学位取得に対するこのときの熱意を記した手紙を、指導教官 Boas に対ししたためている。

私がどれほどコロンビア大学で勉強する機会を熱望していたかお分かりにならないでしょう (Hemenway, 1980: p.208) .

直前の部分には、これまで苦学してきたこと、十分な資金がなく学位を取る勉強ができなかったことなどが書かれ、Hemenway は、この手紙には「Boas の同情を得ようとする Zora の技術が幾分」見られると述べている (Hemenway, 1980: p. 207) . この手紙では、Hurstons は言葉の上で「熱望していた」と述べているに過ぎず、内からにじむ熱意の表出が見られないのである。これから指導を受ける教官に対し学業への熱意を示そうとするのは当然の行為であることを考慮すれば、指導教官に宛てたものよりも、友人関係にあった Grover への前掲の手紙の方に本心が出ていると考えるのが妥当であろう。

また、この時期、Hurstons には、ハイチでフーダーの起源を追うという企画が既にあった。Hurstons は、フィールドに出る前の 3 学期間だけ大学院に在籍して勉強するという意志を表明する。この意向はローゼンウォルド財団の意にそぐわなかった。この奨学金はフィールドワークの期間をはさんで長期にわたる学位取得の計画を支援するものではないという判断だったのである。結局、奨学金を 3000 ドルから 700 ドルに減額、また支給期間を 2 年間から 7 ヶ月へ短縮の措置が取られた。これでは、学位取得のために十分な奨学金とは言えず、Hurstons は学位取得を断念することとなる (Hemenway, 1980: pp. 208-9) .

But I have lost all my zest for a doctorate. I have definitely decided that I never want to teach, so what is the use of the degree? It seems that I am wasting two good years out of my life when I should be working. Then too, I love my Florida. I am sick of these dull gray skies and what not. I want to be back home!

でも、博士の学位への熱意はすっかりなくなってしまいました。教職に就きたいという気持ちはないのだとはっきりわかったのです。そう考えると、学位は役に立ちそうもありま

せん。ちゃんと仕事をしなければならないときに、2 年も無駄にするような気がします。やはりフロリダが好きです。このどんよりした空や諸々にうんざりしています。故郷に帰りたいわ (1935 年 5 月 14 日付け Edwin Osgood Grover 宛書簡) .

指導教官 Boas に対し書いた手紙で示した熱意の信ぴょう性を疑わせる淡泊さである。「Dear friend」という呼びかけで始まるニューヨークからのこの手紙の中で、Hurstons はうまく行かなかった愚痴を言うでもなく、その気持ちは既にフロリダに向いているのである。また、この書簡で Hurstons が「仕事」(“work”)と言うとき、それは学位取得のための勉強ではなく、フィールドワークやコンサート、劇の上演活動を指しているのである。これは、彼女のこのときの志向を窺わせるものである。

2. Hurstons の志向

この時の志向によって Hurstons は大学教員への道を自ら閉ざし、このときの決心が不安定な将来の生活の方向づけをすることになったと考えられる。上の書簡に垣間見られる Hurstons の志向、このような決断に至らしめた志向について、一旦暦を戻し探ることにしよう。

次にあげるのは、その後交遊が長く続くことになった Grover への最初の手紙である。

Under Dr. B. [Boaz] I have done three years research among my people and possibly I know as much about the matter as anyone else.

Seeing the stuff that is being put forth by over-wrought members of my own race, and well-meaning but uninformed white people I conceived the idea of giving a series of concerts of untampered-with Negro folk material so that people may see what we are really like.

Boas 博士のもとで、3 年間同胞の間でリサーチをしました。このことに関し一番よく知っているのは私ではないかと思えます。

いささかやりすぎの私の仲間、それに悪気はないけれどわかっていない白人の人たちが出してきた資料を見て、全然手を入れられていない黒人音楽を素材にしたコンサートを公演して回るというアイデアを思いついたのです。私たちの本当の姿を見てもらえるように（1932年6月8日付け Edwin Osgood Grover 宛書簡）。

これは、Grover のいるロリンズ大学で上に述べられているような内容のコンサートを公演できないかと打診する書簡である。この中には、アフリカ系アメリカ人の文化をありのままに公にしたいという気持ちが見え、コンサートに対する熱意が認められる。Hurstons はすぐに次の手紙をしたためている。前掲の書簡から1週間後のことである。

You see, I feel that the real Negro theatre is yet to be born and I dont [sic] see why it should not first see the light of day in Eatonville, the first colored town in the U.S.A. I have lots of material prepared to this end and would love to work it out with the help of some one who knows a lot that I dont [sic] know.

... I would love more than anything else to build a playhouse for our use here. The whole town is excited about the project. You know we are a dramatic people. I mean that literally. We dramatize every waking moment of our lives. And while this town is luke warm to schools, civic improvement, etc. everybody except the preachers are keen to take part in the concerts and the dramas.

本当の黒人の劇場はこれから生まれるんだという気がします。場所はイトンビルがふさわしいと思います。アメリカで最初の黒人

の町ですもの。このために沢山の資料を用意しました。私が知らないことを沢山知っている人に助けを借りて、やり遂げたいと思っています。

[中略] 何よりも自分たちで使える劇場を建てたいのです。町中がこの計画に沸き立っています。私たちは文字通りドラマティックな連中ですから。私たちは、人生の一瞬一瞬を劇にするんです。牧師さん以外はみんなコンサートや劇をやりたいがっています（1932年6月15日付け Edwin Osgood Grover 宛書簡）。

手紙の内容は、この後もコンサートの会場や具体的内容に及び、書き方やそこに見られる意欲は、学位取得のための勉強に対する態度に比べると、大きく異なっている。学位取得のために大学に残ることをやめ、フィールドワークを続け、採集されたフォークロアなどの素材を中心としたコンサートや劇の創作・上演活動を行っていくことにした Hurstons の決断は、アフリカ系アメリカ人の文化を採集してアフリカ系アメリカ人自身の手によって世に送り出したいと願う Hurstons 本来の志を考えると、当然といえば当然の帰結だったのである。

また、小説家としての活動を中心に見ると、学位取得を断念した1935年は、最も良くできた代表作 *Their Eyes Were Watching God*（「彼らの目は神を見ていた」）（Hurstons, 1990b）誕生日前夜にあたる。この作品は、1936年11月から12月にかけてハイチにおいて執筆され、翌1937年に出版された。1935年の決断が、本格的創作活動へ Hurstons を向かわせ、フィールドワークから得られたフォークロアは小説の素材として生きて *Their Eyes Were Watching God* においてアフリカ系アメリカ人文化の描写に結実したと考えられるのである（注5）。Hurstons は一旦文壇から忘れられた存在となっていたが、この作品は Alice Walker らによる Hurstons 再評価の主要な対象となったのである。執筆時期は、1936年の11月から12月であるが、次の書簡を見ると、3月の時点で既に作品のテーマ、構想、人物設定が Hurstons の中には存在していたことがわかる。

My next book is to be a novel about a woman who was from childhood hungry for life and the earth, but because she had beautiful hair, was always being skotched [sic] upon a flag-pole by the men who loved her and forced to sit there. At forty she got her chance at mud. Mud, lush and fecund with a buck Negro called Teacake. He took her down into the Everglades where people worked and sweated and loved and died violently, where no such thing as flag-poles for women existed.

次の本はある女性についての小説です。彼女は子供の頃から、世の中を知りたがり、また、納得できる生き方をしたがる人なのですが、その美しい髪を見せびらかすために、彼女を愛する男達によってこれ見よがしに無理やり座らされていたのです。40才にして、彼女はTeacakeという名の活きのいい黒人の若者と求め続けていた深い結びつきを持ちました。彼は彼女をエヴァーグレイズに連れていきますが、そこは人々が肉体労働をし荒っぽく恋したり死んだりするという所で、女性が看板扱いされることもないのです（1936年3月7日付けWilliam Stanley Hoole宛書簡）。

この後、Hurstonsは作家として最も活動的な時期を迎える。出版された最後の小説となった*Seraph on the Suwanee*（「スワニー河の天使」）（Hurstons, 1991b）の創作期までは、経済的には不安定であり、彼女の志の達成に完全には良い環境とは言えないものの、パトロンであったRufus Osgood Mason夫人による援助、奨学金などによって、フォークロアの収集、小説、伝記の執筆と、思うことができた時期であった。

3. 晩年

しかし、*Seraph on the Suwanee*の出版年にあたる1948年、Hurstonsの人生は暗転する。この年、Hurstons

は少年に対するわいせつ行為の容疑で起訴されたのである。これはえん罪であり、1949年には起訴を取り下げられるが、この間この事件はマスコミの格好の標的となり、Hurstonsは精神的に相当な痛手を被ったのである。この事件を境に、Hurstonsの晩年が始まったと言ってもよい。以後、貧困と病気に苦しめられ、精神的にも不安定となる。サタデー・イブニング・ポスト誌やフロリダの地方紙などに記事やエッセイを寄稿し掲載されるが、創作活動の点からすると衰退期に入り、Hurstonsが残した著作はその散漫さや完成度の低さのために出版社から受け入れられることはほとんどなかった。晩年、Hurstonsが最も熱心に創作に取り組んだ長編“Herod the Great”（「ヘロデ大王」）もついに日の目を見ることがなかったのである（注6）。

このような晩年にあって、精神を痛めつけられ、Hurstonsは過去の決断を悔いこの時の状況をかちつつ過ごしていたのだろうか。否である。司書、代用教員、果ては白人家庭のメイドに至るまで、生活のためにある時期職には就くものの、それを本業とする意志はなく、生涯物書きという意識を持ち、執筆活動を続けていたのである。

この頃のHurstonsを知る手がかりになるものとして、2通の書簡をあげよう。これらは、晩年の苦しい時代の中でも、比較的平穏な時期、フロリダ州オーガリーでの5年間の生活の中で書かれたものである。次の手紙からは、当時のHurstonsの活動状況がわかる。

I have done a series of five folk concerts here in the last six weeks and picked up a little money that way. I could do more but it takes from my writing time. I had no intension of doing any, but people here discovering my reputation in that respect begged me to do it. Four concerts for white audiences and one for colored, and now I am being asked all over to keep it up. Too much work for too little money.

この6週間にここで5つのフォークコンサートを開き、少しばかり稼ぎました。もっ

とできたけれど、執筆の時間を取られてしまいますから、やるつもりもなかったのですが、ここの人たちがその方面での私の評判を知ってどうしてもとせがんだのです。白人のために4つと黒人のために1つやりました。それで、続けるようにとあちこちで言われている。仕事量の割にはお金になりません（1952年3月6日付け Jean Parker Waterbury 宛書簡）。

次の手紙では、当時の Hurston の経済的状況とともに、ペットとの暮らしぶりを見ることができる。Hurston は、犬と猫の様子を観察し、8つの項目に分けて示している。項目はそれぞれ「猫のユーモア・センス」「先祖返り」「消えた子犬」「助産婦 Spot」「恋愛騒動」「わめく小猫」「模倣本能」「子犬のお守り」というタイトルが付けられている。作品の所在は定かでないが、この観察をもとに物語を書く可能性も示唆されている。ここでは、長い書簡の一部を「模倣本能」について書かれた部分を含め紹介するが、そこには、観察力、ユーモア、自分の考えに自信を持っている点など、Hurstonらしい姿が認められる。

I have planned the piece out in a jointed way. Each joint deals with some phase of my observation. Foreexample: . . .
6. THE IMITATIVE INSTINCT. Animal psychologists have stressed the fact the domestic animals do not imitate humans, but this is not true. Shag has tried to help me pick peas, tearing them off with her mouth. She imitates a human smile perfectly. A doctor studied her and said that it was not possible because dogs did not have the muscles at the mouth for it, but there it was. Both dogs and the cat help me to catch and kill moths roaches that get into the house. Shag likes to lie on the window-sill. Seeing me run up the shade, she caught the edge of it with her teeth and tried it too. Spot tries to help me

clean up by moving object as she sees me do. Of course, she is likely to take one shoe to where it belongs, but jump upon the bed with the other one, or take it outdoors. . . .

I plan to do this piece in about 4 000 words, divided as I have indicated, under topical headlines.

Cow material still interests me if I can only stop worrying about money and get back to work.

Is it hot here! The fish are going up and down the Indian River washed down in sweat.

話を継いでいくような形式の作品を考えています。私の色んな観察の中からそれぞれの話を作るのです。例えば、[中略] 6 模倣本能動物心理学者は家畜は人間の真似をしないと張り張っているけれど、それはうそ。Shag は口で裂いて豆を摘むのを手伝おうとしたことがあるし、本当に人間みたいに笑うのよ。犬には笑う筋肉がないから無理と医者と言ったけれどね。犬も猫も蛾やゴキブリを捕まえるのを手伝おうとします。Shag は窓のところにいるのが好きで、私がシェードをあげるのを見ると、はじっこをくわえて一緒にやろうとするし、Spot は物を動かして掃除を手伝おうとするの。勿論、靴をかたっぽだけいつもの場所に置いて、もう片方はベッドや外に持って行ってしまおうというのもよくあることなのだけれどね。[中略]

この作品を4000語ぐらいでまとめようと計画しています。上のように、話題ごとに分けて。

牛の件にはまだ関心があります(注7)。お金の心配が無くなって仕事に戻れさえしたら。

ここはなんて暑いんでしょう！魚が汗まみれでインディアン・リバーを右往左往しています（1952年6月15日付け Jean Parker Waterbury 宛書簡）。

この時期、主に世に出たのは殺人罪で起訴された Ruby McCollum に関する一連の記事であり、この執筆が生活の糧となっていたのであるが、なおコンサート活動を続けるとともに、Hurstons は日常目にした出来事をも創作の素材にとらえ、その創作意欲は失われることはなかったのである（注 8）。

結 語

1935年、Hurstons が下した決断は、苦しい後半生へと彼女を導くものであった。しかし、書簡に見える Hurstons の志向、フォークロアやフードゥに関する資料を収集し、アフリカ系アメリカ人の文化をコンサート、演劇、小説の形で世に示し保存するという志を考慮すれば、これは当然の決意であったと言える。そして、この決断が、学究よりも創作の道へと Hurstons を進ませることとなり、再評価の中心対象となった代表作 *Their Eyes Watching God* を生んだのである。貧困や病気に苦しめられた晩年ではあったが、当時の書簡には、創作のための素材を常に意識し、物書きとしての姿勢をなお貫いている Hurstons の姿が映し出されていたのである。

注

- 1 Hurstons の書簡集出版の情報に関しては、インターネット上の Hurstons 研究のホームページ “Zora Neale Hurston” 参照（Hinton, 2001. 12. 3）。
- 2 Zora Neale Hurston, *Moses, Man of the Mountain*, 献辞参照（Hurstons, 1991a）。
- 3 フロリダ大学図書館手稿・稀覯本保管所には、出版元である Lippincott Company より Grover に宛て *Jonah & Gourd Vine* の出版への支援を感謝する書簡が保管されている。
- 4 以下すべての書簡及び引用は筆者訳出。また、以下、引用文の出典の記載のない書簡は、フロリダ大学スミザーズ図書館手稿・稀覯本保管所 Hurstons コレクションから紹介するものである。
- 5 詳細は、拙著『『この世の驃馬』を越えて』参照

（西垣内，1999）。

- 6 この草稿はフロリダ大学図書館手稿・稀覯本保管所に保管されている。
- 7 この頃携わっていたギニー牛に関する調査を指すものと考えられる。
- 8 McCullum 関連の記事は、“Zora’s Revealing Story of Ruby’s First Day in Court” 他10篇があり、ピッツバーグ・クーリエに掲載された（Hemenway, 1980: p.358）。

文 献

- Davis RP (1997) *Zora Neale Hurston: An Annotated Bibliography and Reference Book*. Greenwood Press, Westport.
- Hemenway RE (1980) *Zora Neale Hurston: A Literary Biography*. University of Illinois Press, Urbana and Chicago.
- Hinton KA (2001.12. 3) Zora Neale Hurston.
<http://i.am/zora>
- Hurstons ZN (1990) *Jonah & Gourd Vine* (Harper Perennial edition) Harper Collins Publishers, New York.
- Hurstons ZN (1990) *Their Eyes Were Watching God* (Harper Perennial edition) Harper Collins Publishers, New York.
- Hurstons ZN (1991) *Moses, Man of the Mountain* (Harper Perennial edition) Harper Collins Publishers, New York.
- Hurstons ZN (1991) *Seraph on the Suwanee* (Harper Perennial edition) Harper Collins Publishers, New York.
- 西垣内磨留美 (1999) 『『この世の驃馬』を越えて』。長野県看護大学紀要, 1: 1-8。
- O Sullivan, Jr. MJ, Lane JC (1991) Zora Neale Hurston at Rollins College. Glassman S, Seidel KL (ed) *Zora in Florida*, 130-137, University of Central Florida Press, Orlando.

【Summary】

The Turning Point: the Letters of Zora Neale Hurston

Marumi NISHIGAUCHI

Nagano College of Nursing

This paper attempts to illuminate her inclination or the motive of her action through the introduction and examination of the unpublished letters of Zora Neale Hurston that are kept at University of Florida Library.

The Rosenwald Foundation offered Hurston a fellowship to get the doctor's degree in 1934. The degree was expected to lead her to academic life as an anthropologist or a folklorist. She, however, decided to give up this attempt in the next year. This action can be said to decide the latter (and bitter) half of her life. What motivated her was her inclination to collect and preserve the materials about Hoodoo or folklore and make public African-American culture in concerts, dramas or novels. The letters show how devoted she was to the theater. This explains that she was oriented toward fieldworks and creative activities rather than academic activities. After that decision, she was most active in her life and wrote her greatest novel, *Their Eyes Were Watching God*, in 1936.

We can also see her later years through her letters. The old artist was in her declining years because of poverty and disease. She had to manage to make a living by writing articles since the publishers rejected her novels or short stories. But when we read her letter in 1952 and see her gathering materials in everyday life with her pets and planning to work them up into a story, we understand that Hurston never lost a strong will to write stories.

Keywords: Zora Neale Hurston, letters, turning point, inclination, later years

西垣内磨留美（にしがうち まるみ）
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
0265-81-5141（Fax 兼）
Marumi NISHIGAUCHI
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: mnishiga@nagano-nurs.ac.jp